

〔論文〕

「若者の友人関係の希薄化」 という言説に関する考察

杉本裕司

An examination of the argument that the friendship of Japanese young people has been getting superficial

Yuji SUGIMOTO

要旨

The aim of this study is to examine the argument “the friendship of young people has been getting superficial”, which has begun to prevail among some famous psychiatrists, social psychologists and mass media since 1980's. And the young people who seem to have such superficial friendship have been nicknamed variously – “a schizoid person (not in a psychopathological meaning)”, “a man like a capsule” etc. But now, some relatively young researchers, many of whom mainly specialize in socio-information and communication studies, criticize this argument, which has been now common, on their surveys, and maintain that the friendship of young people has been getting not superficial, but selective – especially by the usage of mobile phones now. I examine these two contrastive arguments and conclude that both camps grasp only one side of young people's personalities and life-styles. Rather, I maintain what is occurring now is the bipolarization of them.

キーワード 若者、友人関係、希薄化、同調的ひきこもり、ケータイ、選択的人間関係、二極分化

序

寒い冬の日、凍えたヤマアラシたちが、お互いの体で暖め合おうとくっつくが、お互いの体のとげが刺さって痛い。離れると痛みはないが、やっぱり寒くてやり切れない。ショーベンハウアーの随筆集『パレルガ・ウント・バラリボメナ』の中で叙述されている、この「ヤマアラシのジレンマ」(ショーベンハウアー, A. 1973年, p.177) という寓話は、他人との心理的距離の

取り方の難しさを表したものとして、今や相当知られるようになったが⁽¹⁾、彼が「おち」として呈示している、「礼儀作法や上品なマナーの発明」という解決策は、このジレンマが孕んでいる人間学的・対人心理学的重要性・深刻さに比して、いささか安直でかつ一般論的であるとの感が否めない⁽²⁾。ひとはいつの時代も他者と関わらざるをえない限り、このジレンマに悩んできたのであり、その意味で普遍的であるが、このジレンマに対処する仕方は、社会・時代・世代のメンタリティーと、その中で形成される個々のパーソナリティーによってさまざまであるといえる。その点でこのジレンマをめぐる問題圏の検討は、「時代を映す鏡」となりうるのである。

本論考は、その本質・機序においてこのジレンマとの関係が深いと思われる現象、即ちそれ以前の世代と比べて「今日の若者の友人関係のあり方が希薄化している」という現象——ただしこの判断の当否の裁定は今では保留しておく——に検討を加えるものである。そしてそのことを通して、現代の若者のライフスタイルを、そして上記したように、それを鏡として映し出される現代日本の社会状況をわずかながらも明晰化してみたいと考えている。(因みに本論考では基本的に「若者」という言葉を用いることとし、「青年(期)」というタームは使用しない。その理由は、第一に本論考が、「青年(前・中・後)期」を発達心理学的な研究対象とするものではないということ、別言すれば、「成人(大人)」になるための発達課題をどのように果たすべきか、あるいは他者に対する社会的スキルをどう身につけるべきか、という発達段階論的な当為の視座に立つものではないこと、その意味では若い人々の「生態」という事象そのものに接近していくという点で、所謂「若者論」に近いこと⁽³⁾、第二にユング派、とくに元型派の見方⁽⁴⁾に立つことにより、「発達」という概念をひとまず括弧に入れ、ライフサイクルを直線的にではなく、文字通り円環の相において捉えてみたいこと⁽⁵⁾——つまりある若者の方が「年齢的には大人」の人物より、ずっと「大人」でありうること(逆に言えば又、子どもより幼稚でもありうること)、にある。

1

「若者の友人関係が、それ以前の世代、例えば団塊の世代と比べて希薄化している」という言説は、わが国の若者の永続的モラトリアムが常態化した1980年代初めに一般的に登場し、携帯電話が若者文化を中心に巷間を瞬く間に席卷した今日に至るまで、さまざまな論者によってくり返し主張されている⁽⁶⁾。論者の多くが、臨床に携わる精神科医であることが特徴的な点であるが、彼らの主張はそれぞれ独自の視点からの洞察に基づいたものであり、それ故さまざまなヴァリエーションを示している。しかし、それらに通底している最大公約数的な代表的テーゼを析出することは可能であると考え、以下にそれらを列挙してみたい。(ただし誤解されてはならないのは、「若者の友人関係の希薄化」ということ自体は決して病理的な事態としては捉えられてはおらず、従って以下に述べる諸特徴も決して「症候群」ではない、ということである。)

- 1) 「ヤマアラシのジレンマ」に対する今日の若者独自の対応の仕方として生じてきたものである、ということ (とくに小此木、1993年〔1980年〕、p. 201)
- 2) 「孤立すること (独りになること)」は不安だが (従って、後述するように仲間は大切である)、深い関わりは苦手とする。
- 3) 特に情緒的な関わり合い (絡み) は苦手なので、一時的、部分的あるいは表面的な関わり方をする (おしゃべりにおいても、表面的一般的な話題を好み、内面的な本音トークはしたくない)。その意味で「シゾイド的」(小此木)あるいは「シゾフレ的」(和田、1994年)と呼んでもよいようなパーソナリティーをもっている。そして又、それ故に大学生の場合、フォーマルな顔でいられる授業時よりも、親睦を深めるためのコンパなどへの出席を嫌う、という「ふれ合い恐怖」的なメンタリティーをもっている⁽⁷⁾。
- 4) ただし、孤立することへの不安があるので、心理的乃至社会的に完全にひきこもるのではない。(その意味で、治療的介入やサポートを必要とする「ひきこもり」青年とは、はっきり区別される。)
- 5) みんなと同調して一見気持ちや考えを合わせているが、物理的には距離

を置き（同調的ひきこもり）、それぞれの状況や場面・相手に応じた自分を見せる。しかしいずれも「本当の自分」ではないと（漠然とであれ、意識的にであれ）感じている⁽⁸⁾。

- 6) 同調することも大切なので、流行には強迫的なほどに敏感になり合わせることが、その中で自分の個性も目立たせたいと思っている。（その点で中島の言う「微差化の心理」〔中島、1998年、p.128〕がそこには働いており、また「人と同じ個性」⁽⁹⁾というパラドクシカルな事態が生じることとなる。）
- 7) お互いのプライベートに属することがらに深く関与・介入・詮索しないことを、相手に対する「やさしさ」と考える。大平に拠れば、それは悩みを打ち明け、解決に協力し合うホットな「やさしさ」から、そっとしておいてあげるウォームな“やさしさ”への変質であり⁽¹⁰⁾、栗原が言うところの「開放的—心情的やさしさ」（1960年代末～70年代初め）、「心情的—閉鎖的やさしさ」（70年代末～80年代初め）から80年代ミーズム以降の「閉鎖的—構造的やさしさ」へと「やさしさ」が変容を遂げたことを意味する⁽¹¹⁾。
- 8) 「仲間」は大切なので気を遣うが、そのソト（ヨソ）には全く無関心である。即ち「仲間以外はみな風景」（宮台真司）と化す。（若者のウチ/ソト意識については後ほど言及する）
- 9) 仲間内で葛藤（衝突）が生じたときは、（自分以外の者も孤立することへの不安をもっていることを知っているから）からだを張った「ケンカ」よりも「シカト系いじめ」（斎藤環）をする。それが相手に最もこたえ、最も「傷つく」やり方であることを知っているのである。
- 10) 何かに呑みこまれる不安が深層心理としてある。

さて、以上のように10項目に汎って、若者の友人関係のあり方の現代的特徴をまとめてみたが（もちろん、すべての若者がこのようなあり方・スタンスを取るわけではない）、次に問われるべきは、このような「若者の友人関係の希薄化」を促した社会的—時代的—心理（心性）的要因としてどのようなことが考えられるのか、別言すれば、この言説を、妥当なものか判断させ

ている根拠として、如何なる現象の出来が想定されるのか、ということである。

このことについて代表的な論者たちの主張を見てみると、まず小此木（1993年〔1980年〕）は、若者に限らず、広く日本人が伝統的日本的な人間関係のあり方を完全には自己否定し切れぬまま、都市化した社会の中で西洋的な個人主義的合理主義的な生き方を身につけていくプロセスにおいて、必然的に生じてきたものとしている。即ち、相手に尽くすことによって相手から評価され尊敬される、という、「日本的マゾヒズム」（小此木、1982年）が期待に反して通用せず、裏切られたりするところから、人々は次第にシゾイド的な適応様式——つまり、裏切られても傷つかないスタンス、己れのすべてを賭けたりはしないスタンス——へ移行していく。その意味で、小此木の言う「シゾイド人間」の見かけ上の自立的な生き方は、本当に個が自立しているひとの個人主義とは異なり、一体感への願望が強いものの、「ヤマアラシのジレンマ」から自分がなくなってしまう恐怖も強く、その中で何とか自分を保とうとして存立する生き方である。繰り返せば、日本人の基本的な一体化志向、依存性が克服されないままで、今の社会の変化に適応して、無理に個人主義的な負荷を自分にかけていこうとすると、このような対人関係のあり方を生じさせるわけである。

次に千石（千石、1991年及び1994年）はこれに対し、物質的に豊かになり、価値観が相対化した現代社会が、別言すれば、あえてギスギスし合う必要のないポストモダンの生活環境が、生活上の危機感を感じることなく互いに助け合うより楽しみ合う友人関係を可能にした、と見る。プレモダンから一足飛びにポストモダンへ移行したわが国では、モダンな社会において絶対的な徳目である努力や自己犠牲がダサイものになり、今現在を楽しむコンサマトリーな価値が主流となった。そこに生じるのは、拘束力の強い組織より、アドホックで断片的な集団の中で、表面的な付き合いによって遊ぶ若者の姿であり、あえて言えば「モダンのインディビジュアルリズムを素通りしたデラシネ的な人間関係」（1991年、p.98）が支配しているのである。

社会学者の栗原（1996年）は、前述した今日の「閉鎖的—構造的なやさしさ」の生成要因を、70年代にはまだ存在していた「ニューファミリー」の

「心情的やさしさ」が、80年代のミーイズムによって、個人個人へと自閉し、しかも社会構造自体が大きく揺らぎ（バブルの崩壊、リストラ）それが、この自閉的なやさしさを後押ししていることに求めている。

最後にもう一人挙げれば、長く東大保健センターで学生のこころの相談にあたった臨床経験から、（既述したように）日本人独特の病と言われている「対人恐怖」が「ふれ合い恐怖」とでも呼ぶべきものへと変質していることを指摘している山田（1989年）は⁽¹²⁾、その背景として、父性の弱力化、母性の男性化を考えている。即ち、発達各ステップで、知育のみが優先され、（本来は父性が教えるべき）葛藤処理能力が学習されていないのみならず、（母-子密着が喧伝される割には）本来母性が果たすべき、エロスの性質が減弱化しているのである⁽¹³⁾。

他にも大平（1995年）や和田（1994年）らの精神科医が、若者の友人関係の希薄化についてその原因や背景を分析しているが、いずれにせよ、以上述べてきた諸分析は、多少の強調点の差はあるにせよ、伝統的で一体化志向の強いわが国の社会のあり方、ひいては対人関係のあり方と、近代化以降、特に戦後流入してきた合理主義的個人主義的生き方との相剋の中で、身もだえしつつ（あるいはきわめて器用に）、他者との対人スタンスを取ろうとする若者の姿を描出している。河合隼雄の掣にならって言えば（例えば河合、1976年）、そこにあるのは、個人の意見よりも、集団全体のバランスを保つことに主眼を置き、その方向へと圧力が加わる、母性社会的な「場の倫理」と、何よりも自己主張を促進し、理性的な議論を重んじる、西洋的父性社会的な「個の倫理」を好むようになったと雖も、西洋人に比べれば、まだまだはるかに「場の倫理」に基づいており、基本的なところは変化していない（河合、1994年〔1984年〕、p.69及びp.163）のであり、この母性性はますます強まりつつ、若者を言わば「母性的モラトリアム」（河合・小此木、1989年〔1978年〕p.205）の状態像にとどめているわけである。

さて、以上のように、「若者の友人関係が希薄化している」と主張する論者たちの主張を見てきたが、それらに対して言いうることとして、第一に、全体にこの「事態」に対して批判的トーンが強いということ、そして第二に、特に臨床に携わる精神科医たちは、言わば自分の診察室で起こっていること

から、(決してそこに入室するまでもない)日本の若者の友人関係のあり方の傾向を一般化して述べるという「病理法」⁽¹⁴⁾の方法を取っているということ、である。これらの事実に対しては(当然のことながら)次のような批判が想定されよう、即ち、肝心の若者たち自身が自らの友人関係のあり方をどう思っているか、ということ⁽¹⁵⁾、そしてその一般の実態を知る上でも、経験的な調査によってこのような主張は、補完されねばならないのではないか⁽¹⁶⁾、ということである。

そしてまさしくこの経験的な調査研究——特に若者の携帯電話使用をめぐる諸問題の調査——を行っている研究者達の主張は、興味深いことに、ここまで検討してきた言説と対照的な内容を呈示するのである。

2

若者の友人関係が希薄化した、という言説を展開する論者たちは、携帯電話(以下ケータイと表記)の登場・普及によって、一層この希薄化が促進された、と判断している。「引きこもりアイテム」あるいは、住所不定のヴァーチャルな居場所としてのケータイは、「コミュニケーション幻想型引きこもり」(和田、2001年、p.178)さえ生み出しかねないのであり、小此木(2000年、p.294)も又、「一時的・部分的」な若者の関わりという傾向は、メール機能の普及によってますます増大した、と見ている。情報倫理学者の小原(2002年、p.13)は、若者の人間関係は、その親密度において本当は乏しいものであり、どこかよそよそしく、いつ切り捨てられ、リセットされるのかわからないので、なおのことケータイが欠かせなくなっている、と指摘している。その際、このような論調をとる人々は、世代的には中高年層に属する者が多いことが特徴的である。

このような診断に対し、メディア学や社会情報学を専門とする、比較的若い世代の研究者たちが、実証的調査に基づいたデータに依拠して反論を展開している。彼らによると、ケータイの利用はかえって対面(face to face)コミュニケーションを増加させているのであり、普段よく利用する若者ほど、深い付き合いを好み、孤独感が少なく、相手に自分を開示する傾向が高いのである。より詳細には、電話機能は待ち合わせや約束に使われるツール、メー

ル機能はその時々 の出来事や気持ちの伝達ツール、という主な使い分けの相違はあるものの、ケータイは「フルタイム・インティメート・コミュニティの道具」(小林、2001年、p.40)として、若者の直接的出会いとコミュニケーションを豊かにしているのである。

それでは、何故ケータイによる若者の友人関係の希薄化の促進が声高に叫ばれるのであろうか。橋元(1998年)は、この裁定が、三つの誤りに起因している、とする。即ち第一にコーホート効果と年齢層効果の混同(いつの時代にもある「今どきの若者は……」的意識。第二に分析データの偏り(論者自身と若者〔大抵は教師と学生〕との関係の希薄化の一般化)⁽¹⁷⁾。そして第三に、マスメディアの影響(その論調が、希薄化論推進的なものばかり)、である。そしてこれらのデータや主張を踏まえて、ケータイ的人間関係を、もっとポジティブに評価しようとするこちらの「陣営」の研究者たちは考える。その代表的な主張の一つが、松田(2000年)の「選択的な人間関係論」である。

それは、「番通」つまり発信電話番号表示機能と相俟って可能になった人間関係のもち方であり、「番通」によって、かけてきた相手を確認し、応答するかどうか「選択」するように、自らの意思で好きな相手や気の合う相手とつながるものである。それは何らかの興味・関心、そのときのニーズや気分に従って選択的に、かつ主体的に形成される親密な関係であり、逆に又、そこからの離脱も容易なのだ、とする。それは文脈や局面に応じて使い分けられるが故に、このような関係の仕方を好む若者は、場面に合わせて気軽にスイッチを切り替えることができる「フリッパー志向」(辻、1999年、p.20)的な若者とも言える⁽¹⁸⁾。(だがさらに松田は、重要なのは、全面的で深い人間関係よりも選択的な人間関係を好む傾向の増大は、決してケータイを使いこなす若者に特有なことではなく、「都市化」という文脈で、全世代的に検討されるべき事柄だとも言う。)

このような若手研究者達からの反論に対し、「希薄化」論者たちからの(実態調査に基づいた)論駁は、(管見による限りでは)未だなされていない。だが、若手研究者たちの主張に対して(希薄化論の立場からではなくとも)次のような疑問を呈することは可能であろう。即ち第一に、ケータイ世代の

若者が皆、自分の意思で選択できるほどコミュニケーション・スキルに長けている、器用だ（俗っぽく言えば、このような軽い「ノリ」ができる）と言い切れるのだろうか。そして第二に、「選択する」という能動性は、相手によっても「選択される」という受動性を併せもたないだろうか。さほど重要な用件でなくても、（ひとによっては）相手からの返信がなかなか来ないだけで気になるものであるのに、自分が選ばれなかった時あるいは「不必要」とされた時、その孤立感・喪失感は大きいだろう。この「淘汰されたくない」という気持ちから、若者は東京都青少年調査（1995年）で指摘されたように、友人への過剰な配慮・気遣いを見せるのではないだろうか⁽¹⁹⁾。（もちろんすべての若者が、そのような対人不安的傾向を強めるわけではないだろうが。）そして又、最近では（一部のメディアが伝えるところでは⁽²⁰⁾）ケータイに縛られ、振り回されることを嫌って、それを手放す若者も出現し始めたという。

いずれにせよ、これらの疑問に対し明晰な光を当てる為には、ケータイといったコミュニケーション・ツール乃至パーソナル・メディアと、若者のパーソナリティやライフスタイルとの関連性をより詳細に探索することが要請されるだろう。

3

この問題に関して、ここでは（それぞれアプローチの仕方は異なるが）二人の論者の研究成果を挙げておきたい。一つは、既に言及した橋元（1998年）の分析（そのデータは元々は総務庁「第3回情報化社会と青少年に関する調査（1997年）」である。）分析結果の要点だけを述べれば、特定のメディアの利用が対人関係と関連をもつことは否定できないということ、そしてその際、ケータイやポケベルをふだんよく利用する者は「深い友人関係」を好み、共感性、批判受容耐性が高いのに対し、テレビゲームの利用者は、共感性、コミュニケーション耐性、批判受容耐性がすべて低いという対照的な傾向が明らかになった、ということ、しかしながら、さらに解析を進めると、「友人関係の深さ」にもっとも関係するのは性別（女性の方が深い）なのであり、以下、ケータイの利用、ポケベルの利用が関係するという、そして最後にパーソナル・メディアと性別との関連について付言すれば、テレビゲーム

は女性より男性、しかも年齢が低い者が利用頻度が高い、ということである。まとめると、ケータイやポケベルの利用者は、コミュニケーションに関連する心理特性において、テレビゲームの利用者（男性に多い）と全く逆の特徴を示し、友人とも深いつきあいを好み、交友関係も広いのであり、しかも彼（女）らの多くは、決して「繋がっていないと不安」を抱く人物たちではなく、むしろ外交的で好奇心が強く開放的なパーソナリティーの持ち主なのだ、ということなのである。

以上のような橋元の分析において着目しておくべき事柄は、コミュニケーション・ツール乃至パーソナル・メディアの種別と、若者のコミュニケーションに関わるメンタリティーのタイプ（今の文脈で最も重要なのは、友人との深いつきあいを好むかどうか）との間に相関性があるということ、そしてこのことに対しては第一に性別の問題が析出されてくる、ということである。

そして次に、精神科医の齋藤環による分析（2001年及び2003年）である。彼の分析が出色な点は、単に臨床からの病理法的洞察ではなく、積極的に街に出て若者たちに対しディープ・インタビューを行い、それに基づいて展開されていることである。そして彼がこの方法を取ったのは何よりも、これまで巷間に溢れる若者論の多くが、どのようなものであれ、極めて一面的に若者を捉えているように思われることであった。これに対して彼は、現代の若者が大きく2つの傾向に二極分化してきていると言う。（もっともそれは静的な分類ではなく、両者の共存や相互移行さえありうるが）。その2つを彼は、「ひきこもり系」及び「じぶん探し系」と呼ぶが、ここで着目すべきは、ケータイの急速な普及がこの両極端化を促進した、と見ている点である。齋藤の分析に従い、この2つをいくつかの観点において対比的に特徴づけると、まず「ひきこもり系」とは「文字通り自室にひきこもる若者から、社会参加はしているものの、他人と交わるよりは自分の世界を追求しているほうが好きな若者まで広く含まれ」（2003年、p.16）るものである。コミュニケーション能力は低く、友人の数は少なく、自己イメージは安定しており、自信のよりどころは自分自身との関係であり、親和性の高いメディアはインターネットであり、そして一人で居られる能力は高い。なお（陥りうる）精神障害との関連性を言えば、シゾイド人格障害・社会的ひきこもり・対人恐怖症とい

うことになる。これに対し「じぶん探し系」とは、一般にコミュニケーションが巧みで友人が多く、行動的で活発な若者であり、ケータイなしでは生きていけないほどそれに依存し、常に誰かと繋がっていることを求めているものである。コミュニケーション能力は高く、友人の数は多く、自己イメージは不安定であり、自信のよりどころは仲間との関係であり、親和性の高いメディアはケータイであり⁽²¹⁾、そして一人で居られる能力は低い。なお（陥りうる）精神障害との関連性を言えば、境界性人格障害・解離性障害・摂食障害ということになる。

再度強調することになるが、今の若者が「徹底した遮断あるいは徹底した融合へと二極分化しつつある」のは「携帯の普及によって」(2001年, p.168)なのである。ここで「徹底した融合」とされる方向にあるのは、もちろん「じぶん探し系」の若者であるが、そこにおけるケータイ的間主観性において重要なのは、「ノリ」と「勢い」であると斎藤は纏めている。

斎藤は、この2つの若者のタイプと性別の関係については言及していないが、両者の病理的状態像について考えれば、周知の通り「社会的ひきこもり」は男性に多く、「境界性人格障害」や「摂食障害」は女性に多い⁽²²⁾。それ故、ケータイを手放せず徹底して融合を志向する若者は女性に多いのではないか、ということは想像に難くない。そしてこの点において、橋元と斎藤の分析の接点が見えてくるのである。

ところで千石は、自らの調査に基づいて、高校生に関して女子は男子よりかなり突っ込んだ交際をしており、「人間関係深入り型」とでも呼ぶべきライフスタイルをしており、日本の社会は、(学歴競争の戦士として)男子に少なからぬプレッシャーをかけているのだ、と理由づけしている(千石、1991年、p.86及びp.106)⁽²³⁾。このことが、上記した「ノリ」と「勢い」を女子にもたらしているのか、それとも宮台の言うように、(宮台、1998年)「女の子」の方が「永久に輝くことのない終わりなき日常」を「まったり生きる知恵」を身につけていることが、それをもたらしているのか(それとも全く別の要因があるのか)はここではペンディングとしておきたい。むしろ指摘しておくべきことは、このような「見かけ上」の「勢いのよさ」「元気さ」の深層に、「自己イメージ」の不安定さやときには解離状態さえもたらしか

ねないような、自我の脆さ、危うさが存在しはしないか、と考えておくことだろう。いずれにせよ、コミュニケーション・ツールあるいはパーソナル・メディアと性別との関係、そしてまたこの事実を表れていることの意味は、アイデンティティの捉え方や自己評価の仕方の性差という、より広い枠組の中で論ぜられるべきだと考えられるが、このことは稿を改めて考究したいと思う。

結

さて、以上のように我々は「若者の友人関係が希薄化している」という言説について、まさに現代の若者バージョンの「ヤマアラシのジレンマ」という観点から検討を加えてきた。結論として言いうることは、「希薄化」論者達の主張——第一節で箇条書きしたそれら——は、若者のメンタリティーの一面を拡大して見ているか、あるいは異なった性質のもののコングラマリットを呈示しているという印象を免れない。もっともこのことは、彼らの特徴づけのそれぞれが正鵠を得ていない、ということではない。また、ある意味では彼らに対するアンチポードとして出てきた「選択的關係」論者もまた、ケータイを使いこなす器用な、ポジティブで外向的な、可変的狀況にうまく対応できる若者たち（しかもその表面）のみを見ている感がある。おそらく両者は、「ヤマアラシのジレンマ」を一つのスペクトルとしたとき、その両端近くをそれぞれに浮き彫りにしてくれているように思われる。その一端には（単なる心理的にとどまらぬ）社会的ひきこもり群——他者との関わりを一切避ける——が存在し、そして他の一端には、常に誰かと繋がっていたい「みんなと同じ個性」群——女性に多い——が存在する。そしてその中間に、（程度の差はあれ）「同調的ひきこもり」と呼ばれうる若者たちが浮動しつつ存在しているのだろう。

だが、「希薄化」論者と「選択的關係」論者の両者に共通の洞察もあり、そしてそれこそが今日の若者——ひいては今後の日本社会の在り方——を考える上で最も重要な問題であると筆者は考える。即ち「見知らぬ他者の不在」あるいは「ウチ／ソト」の区別意識の強化と「ソト」に対する無関心化である。この傾向は、「ひきこもる若者」については言うまでもないが、ケータ

イに依存しつつ選択的人間関係を展開する若者にも当て嵌まる。ケータイは気心の知れた仲間とのみの付き合いを可能にする以上、予想外の見知らぬ他者との関わりを閉じてしまう⁽²⁴⁾。コミュニケーションをうまく取れる範囲が狭まり、排他的でローカルになる。そこに生じるのは(既述したように)仲間以外は皆風景(ソト⁽²⁵⁾)と化し、仲間には過剰に配慮するが、見知らぬ他者には無関心な「若者の法則」(香山、2002年)である。しかし、新たな価値観の模索に手がかりを与えるのも、そして又、「本当の自分らしさ」の実感への機会を与えるのも、そのような、他者との「出会い」の体験ではなからうか。しかし、もちろんそのような「出会い」が(比喩的な意味でも)トラウマ的なものになる可能性もあろう⁽²⁶⁾。しかしこのような葛藤とその克服(和解)を体験することこそが、現代の若者に与えられなくなってしまった「イニシエーション」になりうるのではないか。そしてその際、(今はまだ)ひきこもり気味の若者の脆弱な自我を守る殻となっているインターネットや、仲間同士を繋ぐ母性的「臍帯」になっているケータイといったパーソナル・メディアやコミュニケーション・ツールが、如何なる新たな可能性を提示しつつそれに貢献するかは、現在のところ未知数と言わねばならない。

註

- (1) 一般に向けてその普及に寄与したものとして、例えばベラック, L. (1998年)を参照。
- (2) もちろんショーベンハウアーの念頭にあるわけではないが、例えば、マーラー, M. S. のいう乳幼児期の分離-個体化期に生じる、母子間の「再接近期危機」というヤマアラシのジレンマ状況(生後18~24ヶ月頃)に対して、「礼儀作法」という解決策がナンセンスであるのは言うまでもない。マーラー、1981年、p.112ff参照。
- (3) これについては、富田・藤村編(1999年) p.14注2を参照。
- (4) これについては、サミュエルズ, A. (1990年) p.27ff参照。
- (5) 例えば河合華雄、1994年、p.330参照。
- (6) 代表的なものとして、小此木(1993年〔1980年〕及び2000年)、中野(1991年)、大平(1995年)、栗原(1996年)、千石(1991年及び1994年)、山田(1989年)、和田(1994年)、小原(2002年)などがある。
- (7) 山田(1989年)参照。
- (8) スナイダー, M.は、このような「カメレオン人間」こそが現代では適応的に生きようと、評価的に抱えている。(スナイダー、1998年)
- (9) 朝日新聞(熊本版)2000年2月13日(朝刊)の記事の見出しに拠る。
- (10) 大平(1995年)参照。

- (11) 栗原 (1996年)、特に p.308ff.参照。なお竹内 (1997年) は、「傷つく／傷つけること」と「やさしさ」との関係づけをし、それぞれ前者を「避ける」「引き受ける」「招く」「癒す」「癒らす」やさしさの5つに分類した上で、今日の「やさしさ世代」を最初の関係づけに見出す。また興味深いことに、現代の商品のキャッチコピーに多い「地球にやさしい」「自然にやさしい」もまた、これであることを指摘している。(同書 p.47ff.参照。)
- (12) 精神科医の成田 (2001年) もまた、対人恐怖においてかつて多かった赤面恐怖の若者の「恥ずかしい」という訴えが、昨今増加した視線恐怖や体臭恐怖の若者の「怖い」という訴えへと、ここ20年で変質してきたと指摘する (p.4ff.)。同じく鍋田 (1997年) も、古典的な対人恐怖の減少と、シゾイド化・自己愛化の増大を指摘する (p.227ff.)。
- (13) このことは、ユング派の用語で言えば、「グレートマザー」のもつ2つの働きのうち、「慈しみ育む」側面が脆弱化し、「呑みこむ」側面が強くなった、と説明できよう。そうすると、本文中に挙げた10項目のうち最後に記した「何かに呑みこまれる不安」ということに関し、(具体的にはつき合う相手に対する不安だとしても) その背後には、己れの自立を阻もうとするグレートマザーに対する不安、と考えることができる。
- (14) 「病理法」の定義、及びその意義と限界については宮城 (1959年) p.32ff.参照。ところで、小此木の「シゾイド人間」にしても和田の「シゾフレ人間」にしても、言うまでもなくいずれも統合失調症 (schizophrenia) からの造語であるが、誤解されてはならないのは、病的な状態像や人格障害——例えばフェアベーン、R.の言う「シゾイド人格」(フェアベーン、1995年、p.29ff.)——と混合されてはならないということである。(ただし小此木の「シゾイド人間」と和田の「シゾフレ人間」では、その意味合いが若干異なることに注意すべきである。前者は、[クレッチタメ的に言えば] 分裂気質のひとつであれ、循環[躁鬱]気質のひとつであれ、現代社会に適應するためには多かれ少なかれシゾイド的にならざるをえない [小此木、1993年、p.193] ということであるのに対し、後者は日本人の伝統的なパーソナリティである「メランコ人間」——これはテレンバッハ、H.のいう「メランコリー親和型」に近いと思われる [テレンバッハ、H.1985年] ——が若者を中心に減少してきた [和田、1994年、p.65] ということである。
- (15) 因みに筆者が、2003年6月の卒業時に、「若者の人間関係が、戦後から今日に至るまでの間に、どんどん『希薄化』してきている、という指摘に対して、それへの賛否を述べた上で、あなたの意見を簡単に書いてください」というアンケートを聴講学生50名に行ったところ、「賛成」は男性8名女性14名 (計22名)、「反対」は男性1名女性10名 (計11名)、「どちらとも言えない」が男性1名女性7名 (計8名) という結果となった (留学生と大学院生9名は省き、学部3、4年生のみを集計した。) その判断の理由となる各自の意見は様々なのでここではその叙述は割合するが、本論考ののちの展開との関係でここで留意しておきたいのは、「反対」11名のうち、10名までが女性である、という事実である。
- (16) 因みに、「同調的ひきこもり」的な友人関係をとる青年の存在を否認している経験的研究も見出される。例えば上野・上潮・桜井・福富 (1994年) を参照。そこでは、交友関係が四群に分類され、「行動的には同調的だが、心理的には友人と距離をとろうとする」青年たちが「表面群」と命名され、その特性が検討されている。
- (17) 臨床に携わる精神科医に関しては、このことは当て嵌まらないが、前述したように、病理法に伴う (過度の) 一般化は考慮されるべきであろう。
- (18) こういった対人スタイルの若者について、最も説得力のある説明をしている研究の1つとして浅野 (1999年) がある。彼は、1992年～93年に杉並区と神戸市の若者 (16～30才) を対象に実施した調査結果を元にして、友人関係のパターンについて3つの要因 (因子) を提示している。即ち 1) 遠心志向因子 (少数の友人より、多方面の友人といろいろな交流する方だ・ひとりの友人との深

いつきあいを大事にするというよりは、浅く広くつきあう方だ・友人の数は比較的多い)、2) 求心志向因子(友人関係はあっさりしていて、お互いに深入りしない・友人というより、ひとりである方が気持ち落ち着く・友人と一緒にいても、別々のことをしていることが多い)、3) 状況志向因子(つきあいの程度に応じて、友人と話す内容は違うことが多い・いろいろな友人とつきあいがあるので、その友人同士はお互いに知り合いではない・ある事柄について、我を忘れて熱中して友人と話すことがよくある)である。そして第三の「状況志向因子」に特に着目し、このポイントが高い若者は、複数の自己を使い分ける能力が高く、複数の友人関係を相互に重なり合わないようになし、しかしながら、相手に対し別にクールに役割演技をしているわけではない、と分析した上で、今や若者の3分の1がこのタイプに該当する、としている。

私見では、「希薄化」論者たちは、浅野のこの分析に従うなら、これらの因子から彼らにとってネガティブに見える特徴を、いっしょくたにしてイメージ化しているのではなからうか。

(19) 羽調(2002年)は「たとえ、仲間から呼んでもらえなかったとしても、『その集まりに必要な人間としての自分』を情報として知ることができる。その情報を元手に、魅力のある『わたし』になれるように努力することができるのである」(p.118)と述べているが、このような「ポジティブ」な捉え方をする若者が多く存在するとは、少なくとも筆者には思えない。

(20) AERA(朝日新聞社)2002年10月7日号の記事「ケータイをやめた人たち」参照。

(21) 斎藤は、「機能的にはかなりの重複があるにもかかわらず、携帯の機能はインターネットの対極にある」(2001年、p.167)と言う。

(22) 「ひきこもり」が男性に多いことに関しては、例えば斎藤、1998年、p.33参照。「境界性人格障害」及び「摂食障害」が女性に多いことに関してはDSM-IV(1996年) p.652、p.547及びp.552を参照。

(23) 中学生に関しても、女子の方が男子より「元気がある」という指摘が、河地によって、世界4都市調査の結果に基づいてなされている。(河地、2003年、p.205以降参照)。

(24) このことは選択的人間関係の欠点として、その主導的論者である松田自身も認めている(松田、2002年、p.223)。

(25) 正高(2003年)は、「ルーズソックス系」の女子高生にとって、すべては「家のなか」と化した(ただし無感覚でいられる異邦人はいる)と分析している(p.14ff)が、首背できない。むしろ「ウチ」と「ソト」との中間領域としての「セケン」(これらの関係については井上[1977年]参照)が消滅しつつあるのだと、主張したい。(このことについては、別の機会に論じたいと思う)。

(26) ここでは、セクシュアルな欲求充足のみを初めから目的とした所謂「出会い系」サイトのことは一応除外している。

引用・参照文献(論文) 一覧(50音順)

- ・ 浅野智彦「親密性の新しい形へ」(窪田英典・藤村正之編『みんなほっちの世界』恒星社厚生閣、1999年、第2章)
- ・ 井上忠司「世間体の構造」(日本放送協会、1977年)
- ・ 上野行良・上頼由美子・松井豊・福富綾「青年期の交友関係における同調と心理的距離」(『教育心理学研究』、第42巻、第1号、p.21ff. 1994年)
- ・ 大平健「やさしさの精神病理」(岩波書店、1995年)
- ・ 小此木啓吾『シゾイド人間』(筑摩書房、1993年)(初出は、朝日出版社1980年)
- ・ 同『日本人の阿閩世コンプレックス』(中央公論社、1982年)

- ・同『「ケータイ・ネット人間」の精神分析』（飛鳥新社、2000年）
- ・小原信『iモード時代の「われとわれわれ」』（中央公論新社、2002年）
- ・香山リカ『若者の法則』（岩波書店、2002年）
- ・河合隼雄『母性社会日本の病理』（中央公論社、1976年）
- ・同『日本人とアイデンティティ』（講談社、1995年）（初出は創元社1984年）
- ・同『イメージの心理学』（河合隼雄作品集第Ⅰ期第2巻所収、岩波書店、1994年）
- ・河合隼雄・小此木啓吾『フロイトとユング』（第三文明社、1989年）（初出は思案社1978年）
- ・河地和子『自信力はどう育つか』（朝日新聞社、2003年）
- ・栗原彬『増補・新版 やさしさの存在証明』（新曜社、1996年）
- ・小林正幸『なぜ、メールは人を感情的にするのか』（ダイヤモンド社、2001年）
- ・斎藤環『社会的ひきこもり』（PHP研究所、1998年）
- ・同『若者のすべて』（PHP研究所、2001年）
- ・同『若者の心のSOS』（日本放送出版協会〔NHK人間講座〕、2003年）
- ・サミュエルズ、A.『ユングとポスト・ユンギアン』（村本・村本訳、創元社、1990年）
- ・ショーペンハウアー、A.『幸福について』（橋本訳、新潮社、1973年）（原著はSchopenhauer, A. Parerga und Paralipomena, 1851年）
- ・スナイター、M.『カメレオン人間の性格』（川島書店、1998年）
- ・千石保『「まじめ」の崩壊』（サイマル出版会、1991年）
- ・同『マサツ回避の世代』（PHP研究所、1994年）
- ・竹内整一『日本人は「やさしい」のか』（筑摩書房、1997年）
- ・辻大介『若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア』（橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版、1999年、第1章）
- ・DSM-IV（高橋・大野・柴矢訳、医学書院、1996年）
- ・テレンバッハ、H.『メランコリー』（みすず書房、1985年）
- ・富田英典・藤村正之編『みんなほっちの世界』（恒星社厚生閣、1999年）
- ・中島純一『メディアと流行の心理』（金子書房、1998年）
- ・中野収『若者文化人類学』（東京書籍、1991年）
- ・鍋田恭孝『対人恐怖・醜形恐怖』（金剛出版、1997年）
- ・成田善弘『若者の精神病理—ここ20年の特徴と変化』（なだいなだ編『〈こころ〉の定点観測』岩波書店、2001年所収）
- ・橋元良明『バーソナル・メディアとコミュニケーション行動』（竹内郁郎・児島和人・橋元良明編『メディア・コミュニケーション論』北樹出版、1998年、第6章）
- ・羽濑一代『ケータイに映る『わたし』』（岡田朋之・松田美佐編『ケータイ学入門』有斐閣、2002年、第5章）
- ・フェアベーン、R.『人格の精神分析学』（講談社、1995年）
- ・ベラック、L.『山アラシのジレンマ』（小此木訳、ダイヤモンド社、1988年）
- ・マラー、M. S. 他『乳幼児の心理的誕生』（高橋他訳、黎明書房、1981年）
- ・正高恒男『ケータイを持ったサル』（中央公論新社、2003年）
- ・松田美佐『若者の友人関係と携帯電話利用—関係希薄化論から選択的關係論へ—』（『社会情報』学研究』4、2000年、p.111ff.）
- ・同『モバイル社会のゆくえ』（岡田朋之・松田美佐編『ケータイ学入門』前掲書、第9章）
- ・宮城音弥『精神分析入門』（岩波書店、1959年）
- ・宮台真司『終わりなき日常を生きろ』（筑摩書房、1998年〔1995年〕）

- ・山田和夫「会食恐怖」（『青年心理』73、金子書房、1989年1月号所収）
- ・和田秀樹「シゾフレ日本人」（KKロングセラーズ、1994年）
- ・同『自分がない症候群の恐怖』（PHP研究所、2001年）（本書は、同氏による『シゾフレ日本人』〔前掲〕の増補版である。）